



三つ首様と桜の木

宮本真里

絵  
宮本真弓

その昔、尾道には三人の盗賊がおつたそうなの。その盗賊の名を想兵衛、亀蔵、利助という。この三人、普通の盗賊とはちいつとばかり変わったおり、盗みを働くのは大抵金をえつともつとる者だけ。それで、盗んだもんは、貧しいやつに恵んでやつとつたそうじゃ。

けど、終いには捕まってしもうて処刑された。処刑されたその夜、寺の住職の夢枕に三人が現れてこう言つたそうじゃ。

「三人の首を供養してくれるんじやつたら、病で苦しんどる者をわしらが助けてやろう」とな。それからしばらくして、この寺の本堂の隣に三人の盗賊を供養する墓が建てられた。病を癒してもらおうとえつと人が来たらしい。それで、この墓は「三つ首様」と呼ばれるようになったそうなの。

尾道の山には、それはもうたくさんのお寺があります。小坊主が修行していたお寺は、その中のひとつでした。

春も終わろうとしていた、ある日の夕方頃。小坊主はいつものように境内の掃除をしていました。箒を使い、散ってしまった桜の花びらをかき集めていると、一匹の黒猫がどこからともなく現れました。尾道は猫が多く住まう土地で、時折寺にも遊びにやってくるのです。さほど珍しいことでもないので、放っておくことにして、小坊主は掃除を続けました。すると、どこからか話し声が聞こえてきました。「こんぐれえの、仏様でもええじゃろうか」「かまわんじやろう。でも、ご利益がなかったら、いけんぞ」

小坊主は、話し声のするほうにいきました。そこは本堂でした。本堂はお寺の大切な仏様を置いてある場所です。小坊主が本堂の中をうかがうとそこにいたのは数匹の猫でした。みると、先ほどの猫も混じっているではあり

ませんか。

「お前ら、何をしとる？」

猫たちはいつせいに本堂から走って逃げていきました。

小坊主は驚きました。猫が出て行ったことにはありません。本堂に置いてあるうちの一番ちいさな仏様が消えていたことに驚いたのです。ちいさくとも、木彫りの立派な仏様です。もしかしたら、さっきの猫たちが持つていったのかもしれない。仏様を盗むとは、たとえ猫でも罰当たりなことです。小坊主は急いで猫たちを追いかけました。

小坊主は方々走り、猫たちを探しましたがどこにもその姿はありませんでした。

そうこうするうちに、辺りは暗くなり、とうとう夜になりました。小坊主はお寺に帰りたくてたまりませんでした。が、仏様が見つからないままでは帰ることはできません。

真つ暗闇にひとりきり。恐ろしさと心細さで小坊主はどうとう泣き出してしまいました。

「猫や、猫やあ、頼むけえ仏様をかえしてくれえ。それは大事なもんなんじゃあ」

呼びかけても返事などあるはずもなく、小坊主の声は暗闇に消えるばかり。

とそんな時でした。道の向うから提灯を掲げた男が三人やって来たのです。

「おお。さっきの声の主はこの小坊主らしいのう」

「ほんまじゃ。どしたんじゃ。なんで小坊主がこんなところにおる？」

「なんかこまったことでもあったんか？」

男たちは小坊主を取り囲み、問いかけてきました。小坊主は心細さもあって自分がここにいる事情を男たちに話しました。

「そおか、それは困ったことじゃのう。わしらで助けてやるおや」

「そうじゃな。それがええ。じゃが、仏様を盗つてったとはなあ」

「わしらもそこまではできんのう、なんか訳でもあったんかのお」





三人は顔を見合わせ頷きあうと、小坊主に名を名乗りました。

「わしの名は亀蔵という。こっちは想兵衛、んでこっちの男が利助じゃ」

「安心せえ。きつと盗り返してやるけんもう」

三人はにこりと笑うと小坊主の手を引き、歩き始めました。

そうして、歩いていると一本の木が見えてきました。その木は大きな木でしたが、一枚の葉もなく枯れかけているようでした。

「おう。猫がおったぞ。お前が探しとった仏様はあれじゃろう」

想兵衛が指し示したほうに確かに仏様はありました。枯れかけた木の根元にぼつんと置いてあります。その横には仏様を盗んだ猫たちも居ました。

小坊主は走りよると、仏様を手に取り猫に言いました。

「猫や、これは大事な仏様じゃ。返してもらおうぞ」

猫たちは項垂れながら小坊主を見ます。そして、そのなかの一匹が言いました。

「小坊主さん。すまんことをしたというんはわかっどんじゃが、ちゃんとわけがあるんじや。きいてくれんか」

小坊主が猫から事情を聞こうとしたそのとき、どこからかともなく女が現れました。女

は霞がかかったようにぼやけた姿をしていました。

そして、涙を流しながら小坊主たちを見つめて言いました。

私はこの桜の木の精にございます。今は枯れかけ、みすぼらしい姿をしておりますが、春になるとこの尾道の山を彩るため、仲間たちと共に立派に花を咲かせておりました。ですが、ここ数年はその勤めを果たせずにおります。私だけ病にかかってしまったからです。

病は年々悪くなるばかり。以前のように満開の花を咲かせることもかなわなくなりました。そしてどうとうこの土地の主が私を切るように言ったのです。

ええ、仕方がありません。桜としての勤めを果たせずに居るなら、邪魔なだけですもの。それに、ほかの仲間たちに病がうつっては大変ですもの。けれど、どうせ切られる命だとしても最後に

一度だけいい。昔のように立派に咲いてみたい。花を咲かせた自分の姿をこの目に焼き付けて死にたいのです。

無理な願いかもしれませんが、どうしても叶えたかったです。そこで仏様におすがりしようと考えました。お祈りをして、一晩だけでも咲かせて貰えまいかと、そう考えて。

ですが、病の身でお参りに行くのは到底無理な話です。

そこで、古い馴染みであったこの猫たちに、仏様を連れてきて欲しいと頼んだのです。

罰当たりなことだと、私にもわかってはいたのですが、それでも叶えて欲しい願いだったのです。

話を聞いて、小坊主は途方にくれてしまいました。何とかしてやりたいとは思ったのですが、どうやったら助けてやれるか小坊主に皆目見当がつきませんでした。



「なんじゃあ。それじゃったらわしらに任せればええ」

そういったのは利助でした。小坊主と桜の精、それに猫たちは驚いて三人を見ました。

「わしらは盗賊じゃ。盗めんもんはなんもないぞ」

「そうじゃ。そうじゃ。そんな病なんぞ、わしらが盗ってやる」

「桜の精よ。一晚だけとは言わん。病を治して仲間と暮らせ。それが一番ええことじゃ」

三人はそういつて笑いながら、桜の木を取り囲みました。そしてぐるぐる回りながら、桜に掌をかざしました。

淡い光が見えました。その光ははらはらと地面に降ってきます。小坊主はその光をつかみました。よくみると、それは花びらです。枯れかけた桜の木に、淡い桜色の花が咲き誇り、その花びらが雪のように舞っています。



三人の盗賊はにこりと笑いながら、桜の精に言いました。

「どうじゃ。桜は咲いたじゃろう」

「わしらは盗賊。病は盗って治すんじゃ」

「桜よ。安心せい。お前の病は癒えたから、切られる心配はもうないぞ」

そうして、小坊主のほうに向かってにこりと笑うと三人は消えてしまいました。

小坊主がぼかんとしていると、桜の精が小坊主の手をとり言いました。

「ありがとうございます」

いつのまにか小坊主は眠っていたようです。  
目覚めると、そこはお寺の本堂でした。  
あれは夢だったのだろうか。小坊主はきよ  
ろきよろと辺りを見回すとそこには。  
そこには、仏様が桜の花に埋もれるように  
して置いてありました。

